

## 編集後記

『関西大学視聴覚教育』第29号（2006年度）をお届けします。

今号は、論文5篇、特別講義記録3篇、その他3篇という構成になりました。執筆者および関係各位に深甚のお礼を申し上げます。

近年、大学教育における視聴覚教育もITの急速な発達・普及とともに大きく様変わりしてまいりました。取り分けて情報通信の飛躍的な進歩が、教育現場にも本質的な転換をもたらし、ボーダレス化ないしグローバル化を促進しました。韓国と日本の若者が、翻訳ソフトを介してチャットするというような状況は十年前には思いもよらないことでした。まもなく平成元年生まれの若者が大学生になります。コンピュータの「2000年問題」で世界中が大騒ぎしたのも遠い思い出となりました。十年前は、まさしく「前世紀」なのでした。そして「前世紀の遺物」として「LL」ないし「視聴覚教育」という言葉も、大学教育の中から消え去ろうとしております。これは以上のような時代の趨勢から致し方のないところでしょう。本学も大学改革の一環として、次年度には「視聴覚特別教室委員会」と「LL教室委員会」が廃止されて「視聴覚教育運営委員会」のもとに統合され、本誌も廃刊となることが決定されました。これまで本誌で扱った原稿は、将来要望があれば管轄する外国語教育研究機構の紀要『外国語教育研究』に掲載可能のようですが、本誌自体は次号（第30号）をもって終了致します。

本年度なかばにおいて、専任と非常勤の教職員を対象にして行なった本学視聴覚教育全般に関するアンケート結果は集計のうえ、お約束どおり昨年の委員会席上ご報告申し上げます。やはり、設備においてもノウハウにおいても、教育現場からする問題点がいくつか指摘されておりました。改革の行方が注目される所以です。

2006年3月

編集委員長 森瀬壽三